

京鹿子

中華民國十一年三月一日出版
定價：大洋一元（郵費在內）



3月号

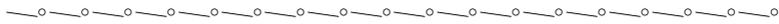
豊 田 都 峰

灌 響 集 その三十一

近景の右の定位置黄葉の二本
遠景は冬の日暮れのすべてとす
枯木立ふたつの星を透かしきる
手にあまること多すぎも年惜しむ
初霞里宮おはす雑木山
神鳴を山に斎くや初茜



初 乘 り は 里 山 日 和 拾 ひ と す
初 鴉 山 の 祠 は 一 巡 り
加 茂 川 の 風 の ま つ は る 酸 茎 買 ふ
薄 氷 を す べ る は 昨 夜 の な ご り 風
寒 日 の 磐 座 襷 を 正 し け り
冬 萌 の い ま さ ら な が ら の 杜 日 和
青 龍 の 棲 み 処 か す み て 川 発 た す
下 萌 の 丘 の 一 座 に 得 る 遠 嶺



一月十日

丸山佳子

歴とした水引を解く一月十日
容易には笑へぬ日あり松の内
春は遅々まさかの時の翹あらば
豆袋大小持参す節分日
いかな世になろふと山は立ち眠る

秀華採集

梟や母はなかなか頷かぬ

奥田筆子

梟の首の振り方を考えれば、横振りと縦振りと言うことになるが、「母」に発展させる所がよい。梟と母の共通点がなんとなく浮かんでくるのが詩の不思議である。

真実を問はれとまどふ冬の百舌

加藤 翅 英

鰯酒や不意に飛び出す恋ばなし

西 村 滋 子

前句は鵯の贅の在り方を想像すればよい。結局何のためにするのか。鵯もわからないのではないか。後句は、すごした飲み方、飛び出すのが「恋ばなし」がほほえましい。

鈴鹿 仁

下 萌

賀茂の名の馴染むあたりのすぐき店

冬川の念ひたぐれば風の立つ

一月のきれいな土塀と京ことば

春の月一重まぶたと謂ふ血すぢ

下萌や深む契りの赤い橋

近 詠

和田 照海

帝 釈 峽

名峽にひねり泳ぎのもみぢ鱒

雄橋を吊り下げてゐる鳶もみぢ

魯田のいちまい杣の小百姓

一山を眠りにつかす山椒魚

杣宿の怠けぐせなる芋水車



水引草 北村 香朗

紅白に咲き分れたり水引草
老いてまだ未練の有りぬ冬帽子
ひとり住み木枯を聴く老ひとり
大蟻螂大の見事な枯れつぷり
いつも摺むつめたきものに鍵の束

ポインセチア 藤岡 紫水

虎落笛暮れば恩讐遠ざかる
生も死もおよそ他人事ポインセチア
雑炊のほてり大事と早寝せり
霜柱育てる闇に風の音
朝暁や水鳥己が影に浮き

松田 都青

秋深し背中にいつもある他人
霜月は綺麗な脚で去つて行く
物差で測れる程の秋愁ひ
紙に包み湯気も値の内焼芋屋
村中の敵も味方も大根干す

禰寝 瓶史

松虫草 尼子砦の火攻め址
赤蜻蛉親し多生のやからかも
旅装解く虫の坩堝に阿蘇眠り
噫して電気鰻のポルト上ぐ
生誓ふ夜寒の崖に幕下りる

丹生をだまき

初競り 丹生をだまき
初競りは童衆に返り金平糖
雨が雪に変わる予感が背を走る
寒晴や青の時代のピカソが好き
重ね着に紫濃淡選びけり

山田をがたま

生涯のガラクタ歳末とて減らず
エイヤツと捨つる物あり歳の暮
老いぬれば去年今年なく臥してをり
寝がへりの痛み薄れず歳を越す
三ヶ日晴れを賜はり佳き年なり



彼岸すぎ 竹貫 示虹
 紅椿花嫁のごと綿帽子
 流れては喜々の聲あぐ春の水
 啓蟄やもう戻れざる穴ひとつ
 みまはして孤りと知りぬ残り鴨
 彼岸すぎ畢王の句のありやなし

木 枯 柴田 朱美

おもかげの母に木枯吹いてをり
 落すものすべて落して木枯す
 凧や太き梁さへ軋みけり
 断ち切れぬものを断ち切り木枯す
 凧やことばは尠ないほうがいい

師走の灯 丸井 巴水

流れ星どこかで遇つたはずのひと
 凍てきらぬ池を見捨てる羽の音
 猟犬の戦死の山を深く掘る
 湯豆腐を掬ひ空論ゆゑ飽きず
 一尾ごと拭く俎板へ師走の灯

月蝕や冬ばら崩るこゑかすか
 冬蝶や恋の終りを唄ひ来て
 野ぼたんの慕情つつまむ掌に
 鳩くぐる間も迷ひなし湖平ら
 ポインセチアの真ん中に佇ち嘘ひとつ
 塩貝 朱千



京鹿子集

豊田都峰選

梟や母はなかなか顔かぬ

定点観測縞ふくろふのドライアイ

白ふくろふ自分を壺のやうに置き

カメレオン本当の自分になり冬眠

冷たさは紅羽二重の帛紗まで

栓を抜けばどつと木枯し吹き込みぬ

残菊や五人必ずまた会はん

真実を問はれとまどふ冬の百舌

鱸酒や不意に飛び出す恋ばなし

野地蔵の瞳の奥は冬夕焼

京都 奥田 筆子

加藤 翅英

西村 滋子

寒鴉もの言ひたげに又も来る

英霊碑いとしむやうに冬の蝶

帰国して師より一服白障子

帰国して茶室湯気立ち子等が待つ

冬座敷妻の字少し丸くなり

お澄ましを決めて水鳥背を向けし

寒犬やおねだりの足裾揺らし

雪囲ひ一人で済ます七十路かな

炬燵出す妻にいつもの仕草あり

熱爛に強き風音遠のけり

アリソナ 伊吹 之博

酒田 藤波 松山

初冬に訪ねる寺は句作り道

渋川 東 秋茄子

友召され讚美歌澄んで冬のバラ

句の道は木の実時雨か香の強し

冬晴の天は底ぬけマラソンの日

五十年一瞬に過ぎ紅葉晴れ

さまま 神田 惣介

山紅葉湖面は青く船白し

裏庭の梟の声森静か

雨上り路端に伏して咲く小菊

冬の日や男峰女峰の睦まじく

冬銀河剪り残しゐる癌一つ

千葉 河内 桜人

人だれも死すものと知る冬銀河

湯豆腐の通り抜けたる切除の胃

舞妓かんざし揺らずに歩む神無月

伊藤 希眸

京洛の鳥瞰図なり木の葉しぐれ

したたれる紅葉將軍塚にこゑ

切り株の消えし年輪暮れ早し

鶴一羽人探すやう祈るやう

直江 裕子

憂きことを白ざざんかに置いてくる

木枯の絵馬をもとばす気負ひかな

返り花ほどよきとこに椅子ひとつ

うなづきつ何やかやとの年用意

岡田 愛子

誰言ふとなく近寄りし一茶の忌

どことなく音の無きまま今朝の霜

垣根越し窓を拭きつゝ今朝の霜

地に還るものの声して山紅葉

柿熟れてだらだら坂の珈琲屋

巨木の奥に日のとどく寒さかな

短日の深きに沈む大落暉

独り掃き独り焚きをり十二月

街道の辻削りゆく空つ風

寒鴉鳩を問へば嗚呼と言ふ

街ひとつ雨に覚めゆく黄落期

ラ・フランスごろりごろりと妻の留守

伊万里の皿ラ・フランスの落ち着かず

布川 孝子

長き夜よ妹の解熱をひたすらに

朝鳴や妹の笑くぼに母を見る

葱の香に郷想ひをりビル酒場

浦安 安田 一郎

高階や月近ければ月語る

宿題ぎらひの児の背そつとちやんちやんこ

ふる里は近くて遠しちやんちやんこ

姥捨ての道に目印ななかまど

甲斐紅葉武将写しの山と川

松戸 岡山 敦子

猿酒甲斐の山並あかく昏れ